



TITLE:

<第1章>高等教育研究開発推進センター外部評価懇談会(<1>外部評価懇談会<2>記録:外部評価委員・評価説明2)

AUTHOR(S):

山本, 眞一

---

CITATION:

山本, 眞一. <第1章>高等教育研究開発推進センター外部評価懇談会(<1>外部評価懇談会<2>記録:外部評価委員・評価説明2). 京都大学高等教育叢書 2006, 22: 58-60

ISSUE DATE:

2006-03-31

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/54036>

RIGHT:

## 2. 山本 眞一 氏（筑波大学教授／大学研究センター長）

（山本）

では、若干感じたこと、あるいは日ごろそちらのセンターさんについて考えていることについてお話ししたいと思うのですが、もうセンターが設立されて 10 年以上たつのですね。最初に京都にこの教授法センターができると聞いたときに、正直言って、どうしてと思ったのです。それは、今日も田中先生や松下先生がおっしゃるように、京都大学というところは伝統的な大学で、部局の自治もあるし、何といても大学教授の社会的地位の高い地域ですから、教授法について自分たちが学びたいと思うかということ、恐らくそういうことはほかの大学に比べて特段に強いはずはないというような思いがあったものですから、その京都大学に教授法のセンターができると聞いて、正直言って非常にびっくりしました。あるいは大胆だと思いました。

しかし、その後の活動を拝見してみますと、やはりそれは、かりに大学の中よりも外の人の参加が多いにしても、着実にその注目度が上がってきて、今や大学教育あるいは教授法といった高等教育の研究や実践活動の中で確固たる地位を占めるようになっており、これはまさにこの教授法センターの大きな貢献だと思います。そういう意味では、世の中の動きにマッチしたことであると。

私のところでもいろいろな研究をしていて、その中で講演会などではしょっちゅう主張しているのですが、これからの大学の役割は、従来のような狭い意味での日本的な大学ではなく、教育についても研究についてもどんどん広がっている。たとえば、四次元にしてやるとみんな分かってもらいやすいので、四次元にしてよく話をするのですけれども、一つは大学というのは知識を作るところですが、この知識は今まで知られていない未知の知識か、だれかが研究してもう知られている既知の知識を水平線にして、それらの垂直線に基礎的なものか応用的なものかというふうに分けますと、これまでの日本の大学、特に伝統的な大学であればあるほど、というか、すでに外国でやられた研究を、しかも基礎的なところで整理し、そして教えるという意味で大体ドメスティックな指向が強いですから、古典的な意味での専門教育や教養教育、それから研究、これはすべてその次元の中に押し込めなければいけないのではないかと思うのです。それで、研究活動は一足先に理系を中心に、むしろ未知の領域、未知の基礎という分野にどんどん広がっていつています。これは世界的な分野で競争が激しくなっているのです。

それに比べると、教育のほうは遅れていたのではないかと私は思うのですが、最近たとえば専門職大学院や、あるいはキャリア教育などということがいわれているように、いわゆる職業教育ですね。それも非常に普通のレベルのものから高度なもの、最も高度なところには多分ビジネススクールや法科大学院があると思うのですが、そういう意味での職業教育的な要素がどんどん広がっています。それは恐らく既知の領域で応用を目指すという次元のところにどんどん進んでいるわけです。ですから、そういう意味で言うと、昔は大学教授や大学は教育方法や教育の役割を学ぶ必要がなかったというのは、既知の領域で、しかも基礎的なものを扱っていたから、特段のことは要らなかったのだけれども、それが応用といった現実の社会の中でどのように知識を生かしていくかということが問題にな

ってくると、まさにその教授法あるいは教育法など、みんな関係してきます。

しかも、そのベースになるのは、やはりそのもともとの領域であるところの専門教育や教養教育で、それらも大きな影響を及ぼすわけですから、そちらのほうにもやっていかなければならない。そのようなことで、大学の役割はどんどん広がっているんで、それは関係者がすべてそれを認識して、それなりに動かなければならないですね。私のセンターでは、それを大学の事務職員がもっと頑張れということで事務職員の研究を今ずっとやっているのですが、やはり大学の機能が変わっているからそのようなこともやらなければならない。それから研究の研究などをやっているところもありますから、そういうところもそうだし、大学の財政論や、あるいはガバナンスなどもそうだし、それと同じように、大学の教育についても、広がりつつある、あるいはすでに広がっている大学の役割や機能に応じた研究が必要だという意味で、本当はもっともっと大学の教育を研究しなければならないという機能を盛り上げなければならない。

京都大学のセンターは、そういう意味で大変大きな役割を果たしておられると思います。各大学でFDなどいろいろな活動は盛んになっていますが、これだけ体系的におまとめになっているところは、恐らく京都大学がいちばんではないかと思いますから、そういう過去からの蓄積というものは大事にしてもらいたいと思っております。それが一つです。

二つめは、そういうことで考えますと、今私のところもそうですが、高等教育センターや大学センターなど名前がついているところで、共通に抱えている悩みがあります。それは何かというと、そのセンターは学内サービスのためのセンターなのか、それともほかの学部や大学院と同じように、外に向かってサービスをするのがメインなのだろうということです。いろいろな考えがあって、これはどちらが正しいとは言えません。私は両方必要だと思うのですが、ややもすると、そのセンターの関係者は学内だけではなく学外にサービスをしているつもりだと言うのですが、大学の中核の人は学内に対してどういう役に立っているかということを常に聞くわけですが、それにある程度答えないと、なかなか学内では発展の芽がないと。

ただし、大学のさまざまな教育・研究の本質として、本当ならば学内で閉じているわけではなくて、やはり必ず学外にも出ていく必要があるし、また実際に、ここで研究会をやられても外の人がたくさん来ているわけですから、そういう意味で、外の人から大変注目されているわけです。

そういう意味で、学内と学外の活動のバランスといいますか、これをどう考えるかという問題があります。これは、この京都大学さんの問題というよりは、むしろ全国の我々のような研究センターに共通の問題です。

そういうことで今拝見させていただきますと、かなり学内で気を遣っておられるというか、学内で相当のことをやっておられるということでした。それはそれでけっこうなのですが、私は先ほど言いましたように、とにかく大学の教育機能というものが非常に拡張して重要になっているわけですから、そちらに向けての活動というのはどういうものがあるのか。いろいろな活動をやっておられますし、また個人的にも研究をやっておられるでしょうから、それでもう十分だろうとは思いますが、その辺がどうなっているのかなということ、またもし時間があれば、あるいは後日でもけっこうですが、教えていただきたいと思います。

その関係で言うと、3番めのポイントとして私が知りたいことは、教育の改善、あるいは教授法の改善といっても、これはやはり相手のあること、つまり相手というのは学生あるいは教育環境ですが、こういったものによってかなり違うわけです。京都大学にはこれがいちばん合っている、あるいは京都大学の先生はこのようにことに注意すべきだというような、啓蒙活動ではないとおっしゃったけれども、自発的に学内でのそういう検討が進むというのは必要なことです。しかし、それと同時に、京都大学が全く違ったタイプの大学の、あるいは学生を教えている先生たちにとって参考になるような情報というのはないものか。

つまり、どういうことかという、学生のタイプに応じた教育システムの在り方、あるいは教授法の在り方、あるいは学生の活動内容など、そういったものを何とか調べられないだろうか。特に最近では社会人学生や、あるいは留学生、それから大学院学生なども増えておりますから、また一方で、学生集めに苦労している大学もいっぱいあるわけで、そういった大学にとって何か処方せんというものがあるのかないのか、こういうこともちょっと知りたいと思うところです。そういったものを研究するところというのはほかにもないものですから、多分こういう京都大学が、いわゆる高等教育の一環として研究されるならば、そういうこともぜひ教えてもらいたいと思います。

最後の4番めのポイントですが、結局高等教育関連のセンターも、私個人的には、いわゆる大学院の何とか専攻や、あるいは何々学部何々学科と同じような役割をやはり果たしているはずであって、そういう意味で、大学の特に学長や副学長や執行部のかたに申し上げたいのです。だからここで申し上げてもしょうがないのですけれども、大学にとって大事なことは、その大学がいかにたくさんの、バラエティある、しかも高度な知的資産を作り出しかということにあるわけです。したがって、学内でちゃんと働いているからそれで十分であると思われるのは、やはり困ると思うのです。

つまり、各大学のセンターで作られているさまざまな知識は、いわば我が国の大学、あるいは世界の大学にとって共通の知的資産だと思いますので、そういう共通の知的資産をどんどん作っていくということが大事なのです。これは、今、法人化で各大学が競争するというようなことで、ちょっと私も心配しているのですが、ある程度の競争は必要だけでも、あまり競争、競争と言って、こちらの知的インフラのレベルをどんどん上げていくということに悪い影響を及ぼしては困るのです。ただ、そういうことをあまりほかでは言いません。高等教育研究者が本当はそういうことを言わなければいけないのですが、残念ながら今はほとんどおっしゃるかたがいません。しかし、我々は研究活動を通じてそういうものを示していかなければならないのではないかと、そのように考えました。

しかし今日聞いたように、学内でさまざまな活動をしておられるということは大変重要なことです。そういう基礎があってこそ、学外にもまた広がっていくものだろうと思いますので、決して今日のご説明の活動があまりよくないという意味は全くなくて、これはけっこうで、それとともに学外にも広がる方法を何とか考えていただきたいなど、そういう意味で申し上げました。

(田中) こちらがきちんと答えなければいけない論点を、たくさん出していただきました。それでは、次に小笠原先生、お願いします。